

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

超近代とは何か 1

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE 生田長江批評選集 超近代とは何か 1 新と旧 書肆心水
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

超近代とは何か
1

新と旧
目次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

生田長江氏

三木清

(序章)　自由と思想と現在の一瞬と

I 新と旧

「新しい」「古い」の問題
「近代」派と「超近代」派との戦
超近代派としての重農主義芸術	(農村のための地方的小都市と世界的大都市のための農村と)
農村問題断片	(都會の農村搾取にみる近代的階級化の構造)
一般的に外国語を学ばしめることの愚劣さ	(および国営翻訳出版事業、そして国際版権条約の不均衡性) ..
英雄崇拜は笑うべきか	(歓的にして神的な人間性) ..
文壇の新時代に与う	(全体性から離れた細部的で風変わりな表現技巧について) ..
序にもう少し新しく	(自称「新時代」者の言説傾向について) ..

SAMPLE
ShopShin-Shinsui.com

II 東洋性・日本性と世界史の局面

東洋人の時代が来る 240

徹底的破壊力としての東洋文化 (資本主義制度の根本的克服のための) 220

最終的文化総合者としての日本 (全人類的新文化創造への日欧文化融合) 207

驚嘆すべき单纯化 (日本固有の美に就いて) 190

ニーチェ雑観 (日本的なものと仏教的なものをめぐって) 180

III 反時代的文芸考

一般群衆と文壇的群衆と 207

文芸家と文壇家 190

日常生活を偏重する悪傾向 (天才者を凡人化することについて) 180

流行児、問題にされることなど 173

超近代とは何か 2 信と善 目次

(序章) 何故鳶が鷹を生むか

(全人格的優劣は遺伝しない)

I

宗教性の審問

虫のいい「人類」その他

無抵抗主義、百姓の真似事など

宗教的な履歴書一通

現代を指導し得べき宗教的偉人

(その具有すべき芸術的性格)

難行苦行を排す

（中道こそ最も宗教的な実践道）

II

解放主義の審問

所謂人道主義改造論者の不徹底

ブルジョアは幸福であるか

マルキシズム自体の阿片性

反宗教運動者等への逆撃

ルンペンの徹底的革命性

及び宗教その物としての教祖的精神

ルンペンの問題

逆境は冷酷にするか ルンペンの問題への一補遺

復讐的革命と宗教的革命

復讐好きな人々だけがマルキシズムに堪えられる

性差別論の審問

家庭保存の新論拠

（大抵の社会主義的家庭觀に反対して）

新貞操論

（恋愛享楽の必要条件として）

婦人解放論の浅薄さ

山川菊栄夫人への反駁

（婦人非解放論の浅薄さ）について

恋愛の意義

（性慾による結婚との関係における）

（附録） 生田長江略年譜

生田長江氏

三木清

私は遂に生田長江氏と面識を得る機会をもたなかつた。氏の文章は当時一介の文学青年であつた私の中学時代からずいぶん愛読したものであり、後に私が哲学をやるようになった原因にも氏のニイチエ紹介の影響などが含まれてゐる。近年は氏の思想の跡に近く接して行くことはできなかつたが、いま氏の死によつて種々の思い出が甦つて来る。

生田氏の仕事は甚だ多方面に亘つてゐる。氏は評論家として最も知られているようであるが、評論のほか氏は詩も作り、劇も作り、小説も書いた。またそのニイチエ全集の翻訳は日本文化史上に、永く記念されるべき業績である。氏は文学者にして思想家であつた。これは我が国では類稀なることである。眞の文学者はつねに同時に思想家であるとすれば、生田氏はまさに文学者らしい文学者であつた。氏の評論は文明批評家的眼光をもつて貫かれ、終始人生の根本に相渉るといふ厳肅な態度を持つてゐる。

氏は文壇といふものから離れて存在し、文壇といふものに対しても寧ろ意識的に反抗的であった。これは氏の

SAMPLE
Shishin-shinsui.com

あの宿命的な病氣にもよるであろうが、また自ら恃むこと極めて厚い氏の性格にも基くであろう。第一流の人は手心なく痛烈に、第二流の人々は努めて同情をもつて批評するというレッシングの態度が批評家の心掛でなければならぬと氏は後進に向つて教訓した、と佐藤春夫氏は書いている。氏は氏のいわゆる「文壇家」を嫌悪した。文壇的でないということにおいて、生田氏はその私淑していた鷗外、漱石などと軌を一にしている。ところが文学者の仕事として永続的価値を有するものはそのような文壇的でない人々の仕事に意外に多いのである。これはこの頃の文壇的なあまりに文壇的な文芸家たちにとつて、また思想家などにとつても考えてみるべきことであろうと思う。文学者にせよ、思想家にせよ、先ず必要なことは自己に忠実であるということである。

けれどもこのことは決して彼等が社会と没交渉であることを意味しない。評論家や哲学者の偉大さの資格は、何か大きな問題を提起して立つということである。生田長江氏の場合にしても、氏の最も華々しい活動が展開されたのは、ちょうど日本の文壇や思想界が自然主義から人道主義へ移つて行った時代であり、氏の活動もまたこれに相応している。生田氏は単に自然主義者でなかつた、氏のうちには遙かに強い人道主義的要求があつた。しかし純粹に理想主義的な人道主義者となるにしては氏には自然主義的因素が多かつた。我が國の人道主義はやがて或る人々において著しく社会的関心を示して來たが、その頃の生田氏の批評的関心も文芸から社会にまで拡大された。『徹底人道主義』『デルジョアは幸福であるか』等は当時の氏を記念する評論集である。氏は堺利彦、大杉栄兩氏などに接近し、友愛会主催の社会問題講演会において演説したこともある。しかし日本の社会思想がやがて明瞭にマルクス主義へ移つて行くに従つて、生田氏は次第にアナキスチックな、ニヒリスチックな傾向を濃厚にして來た。それと共に氏は我が国の文芸及び思想における從来の指導的地位から退くに至つた。

生田長江氏（三木 清）

生田氏には早くから宗教への関心が見出される。その弘治という名も、御大師様の縁日に生れたので、氏の祖父が命名したものであるという。青年時代に氏は教会の洗礼を受けた。後年には积迦伝の大作に着手したが、遂に未完成のままに終ったことは氏として最も遺憾なことであったであろう。しかし『宗教至上』などに現われた氏の思想が宗教としてどれほど徹底していたか、私には疑問である。氏の本質は寧ろどこまでもニイチエ的なヒューマニズムにあるのではないかと思う。「日常生活を偏重する悪傾向」に対して戦つた個人主義的英雄主義的精神において氏はニイチエ的であったが、キリスト教の峻烈な批判者ニイチエがその魂の内奥において宗教的であったと同じように氏もまた宗教的であった。

もちろん氏はニイチエ的なものに留まることに満足せず、ゲーテ的なもの、偉大な調和の美しさを絶えず憧憬したが、遂にそれに到達することなく終ったのはなかろうか。東京朝日新聞に掲載された氏の最後の文章「ニイチエとゲーテ、及び劇的のもの」、また日本評論に発表された遭稿「ニイチエの著作と其劇的傾向」を見ても、それが感ぜられるのである。氏は劇的なものを規定して云う、「芸術家は、彼の主觀的自我が、彼自身の自我が分裂して、いわば幾つもの人格になつて居ながらも、尚且つその分裂や不統一を其儘に表現したい欲求に駆られる時、他の如何なる表現を取るより劇的表現を取るのが便利であると感じ、或は劇的表現の他なる如何なる表現をも取る事が出来ないのである」。生田氏の精神はそのような意味に於て劇的、悲劇的であつたようと思われる。氏のエレメントは悲劇であつた。『円光以後』などに収められた脚本がすべて悲劇であり、氏の作品においても殊に芸術的香氣が高いということも偶然でない。氏は日本人には珍しい悲劇的精神であつた。そこから生れた氏の力強い人道主義的、英雄主義的精神には理論を越えて我々の心を打つものがある。

（一九三六年一月二十四日『三田新聞』）

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

生田長江批評選集

超近代とは何か
1

新と旧

凡例

一、本選集『生田長江批評選集 超近代とは何か』（全二巻）は、生田長江（一八八二～一九三六）の批評文のうち後期の約十五年間（一九二〇年以降）に発表されたものから「超近代」の論点に関わる文章を選んで集めたものである。『超近代派宣言』（一九二五年、至上社刊）所収のものを中心に、その大部分（二十四篇中の十九篇）と、その他の十六篇を収録した。

一、第一巻の巻頭に、生田長江の仕事を簡単に紹介しつつ批評した三木清著「生田長江氏」を収録した（新漢字新仮名遣い表記に変更し、読み仮名ルビを補つた）。第二巻の巻末には生田長江略年譜を附録した。

一、各篇を括ったI II IIIの分類と文言は本書発行所によるものである。
一、各篇のサブタイトルのうち、（）で括つたものは、(1)本書発行所が内容紹介として補つたもの、(2)元々あつた（サブタイトルとしては長きに過ぎる、あるいは明快さを欠いた）サブタイトルを廃して本書発行所が付け直したものである。

一、元の文章はいずれも旧漢字旧仮名遣いであるが、本書では新漢字新仮名遣いで表記した。元の文章における鉤括弧使いは「「」」の形式であるが、これも現代風に「『』」の形式に置き換えた（書物名、雑誌名についても「『』」を使用）。

一、旧漢字ではないが、現今の慣例に適つたものとして置換した漢字は次の通り。卅→三十、聯→連、輯→集、劃→画。

一、行内に挟み込んだ（）括りの二行割注は本書発行所による便宜的な注記である。

一、現今漢字表記することが稀なものは仮名表記に置換した（置換したものはこの凡例の末尾に列挙）。
一、送り仮名は原則として元のままであるが、べく一部、現今の感覚で違和感もあらうと思われるものについては

送り仮名を加減した（例えば、味い→味わい、流→流れ、更らに→更に）。

一、読み仮名ルビ（振り仮名）は元のものの他に若干補った。

一、外国人名の片仮名表記を現代風にしたものがある（例えば、ヘエゲル→ヘーゲル、シェキスピア→シェイクスピア）。

一、生田長江の癖、というべき表記を改めたものがごく少数ある（例えば、あだかも→あたかも、欠ぐ→欠く、畢竟するに→畢竟するに、行きつまる→行きづまる）

一、平仮名表記されている幾つかの語を漢字表記に置換した（例えば、まん着→瞞着、さく取→搾取、き憂→杞憂、むじゅん→矛盾）。これらは、生田が『超近代派宣言』の序文において、「漢字排斥主義の新聞の学芸欄に載せて、減茶苦茶に仮名に改められたのを、再びもとの漢字に書き直すつもりでいながら、矢張時間上の余裕のない為に、ついにその儘にしてしまったものの少なからずあるのは遺憾である」と述べているものにあたると推定したものである。

一、踊り字（繰り返し記号）は「々」以外不使用とした。

一、読点を補足したところが多少ある。例えば、いちにと読む一二など。また過剰な読点を削除したところがごく少数ある。

一、仮名表記に置換したものは五十音順に次の通り（送り仮名は代表例を、活用するものは終止形のみを示した）。

嗚呼、愛蘭、亞細亞、亞米利加、雖も、英吉利、聊か、孰れ、伊太利、苟くも、愈、況んや、印度、斯く、此（かく）の、瓦斯、曾て、嘗て、曾つて、加特力、切支丹、希臘、基督、蓋し、斯う、喬答摩、茲、此、哥林多、是、之、扱て、儲て、然し、而し、然も、而も、屢々、暫く、耆那、宛（ずつ）、乃ち、西班牙、然う、其、抑々・抑も、啻に、独逸、兎角、兎に角・とに角、兎もあれ、兎も角・兎もかく、兎もすれば、兎や角、乃至、尚お、乍ら、加之（のみならず）、婆天連、仏蘭西、可し、波斯、略ぼ・略々・略、亦、馬太、儘、馬可、寧ろ、固より、矢鰐、矢張、稍、動も、猶太、歐羅巴、約翰、路加、羅馬、露西亞

(序章)　自由と思想と現在の一瞬と

自由とは何か？

束縛されていないことだ。

不規律は、無秩序は、混沌状態は、自由であり得るか？

否、それは自由ではない。それは殆んど無数の、種々雑多な物から、束縛されているところのもの以外の何物でもない。

凡て自由なるものは、それ自身の拘えた規律及び秩序の下に生きている。

自由とは、自己支配のほかの何物でもない。

隣人を、自己の延長と見る限りに於て、隣人との相互支配は、充分によく自己支配の一種であり得る。

しかし、隣人を自己の延長と見ることが単なる思想であつて、実感の事実と相異する場合は、隣人との相互支配は、決して自己支配であり得ない。少なくとも彼は、隣人から束縛されているのである。

(序章) 自由と思想と現在の一瞬と

自己を、社会の各員にまで、社会全体にまで、延長し拡大して、考え、且つ感ずることの出来ない人々——それ等の人々によつて打ち建てられた物である限り、如何なる共産的社會も、本当に各個人を自由にするところの、本当に自由な社會ではあり得ない。

アナー・キズムは相互支配、共同支配を形式とし、自己支配を内容とするところの自由なる社会生活を標的としていなければならない。

間接にもせよ、各人が自らの作れる規律及び秩序の下に生きて行く、自由なる社会は、そうした意味での無政府社会は、如何にして招致されるか？

これに就いては、現在のところ唯次の事が言い得られる——×××

思想とは何か？

価値判断の標準になるものである。

或いは「価値判断の標準」及びその論拠である。しかし、価値判断の標準そのものは、全自我から「生命への意志」から「権力への意志」から來てゐる。決して單なる頭脳の一隅からの所産ではない。

しかし、ぴちぴちとした生きた思想そのものは、心臓にも、胃の腑にも、生殖器の中すらも、遍満充実しているのである。

生命は、自己は、刻々に流動変化してやまない。従つて思想が、生きた思想である限り、それもまた刻々に流動変化せざるを得ない。

囚われたる思想、即ち、他から借り物の思想、いつの間にか化石してしまった思想というようなものはあり得る。

しかし、思想が本当に思想として生きている限り、思想に囚われるということはあり得ない。

言葉としてはしばらくの間を同一で持続しようとも、その解釈含蓄が刻々に変移しているならば、その言葉に代表される思想は、必ずしも化石しているのではない。

自己の、また思想の成長は、一面変移であると共に、他面連続延長である。

特にその連續延長するところのものによつて、某々の性格はかくかく、某々の思想はかくかくと云われるのである。

自己が、人格が分裂する時、思想もまた分裂する。
そして分裂した思想は互に相争う。

人格内部の争闘が思想と思想との争闘である場合、これを思想と他の何物かとの（例えば慾情、本能などとの）争闘と見るのは、人々の余りにもたやすく陥るところの過誤である。

(序章) 自由と思想と現在の一瞬と

意欲はかく「あれ」と命令し、理智はかく「あり」と認識するも、「あらねばならぬ」ところの世界は、「未来」の世界であり、「ある」ところの世界は「過去」の世界である。

意欲を君主とした生命の前に現れる世界は未来であり、理智を君主とした生命の前に現れる世界は過去である。

意欲が抑圧されればされるほど世界はいよいよ單なる過去にすぎない物に近づいて行く。必然性にのみ支配されているものの観をして来る。

理智が掩蔽されればされるほど、世界はいよいよ單なる未来に過ぎない物に近づいて行く。一に心のままなるものの観をして行く。

通常人は、つねに中途半端な意欲的態度を取つていると共に、中途半端な理智的態度を取つてている。

即ち、彼の前には、世界はつねに未来と過去との結合である。

達人の（少なくともある場合に於ける）態度は、十分に理智的であると共に、また十分に意欲的である。

即ち、彼の前に現れる世界は、完全に過去であると共に未来である。もしくは、絶対に過去でもなく未来でもない。換言すれば現在である。
達人は現在よりほかの何物をも信じない。彼にとっては現在だけが現在の刹那々だけが、眞実であり、実在であり、絶対的なものであり、不朽性をもつたものである。

刹那々を最も善く生きるのがやがて永遠に最も善く生きるのである。

利那々々を最も善く生きて行こうとする達人にとって、世界は必然的なものとして認識されると共に、自由なものとして感得される。これが彼の聰明と、彼の勇氣との根源なのである。

(1924.4)

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

I

.....
SAMPLE
新
と
旧
Shoshi-Shinsui.com

「新しい」「旧い」の問題

新事物崇拜は近代的迷信

今日では、殆んど総ての場合、「新しい」は価値のあること、優っていることを意味し、「旧い」は価値のないこと、劣っていることを意味している。前者は直に賞讃であり、後者は直に非難である。

そしてかくの如き事態を是認しているにもせよ、是認していないにもせよ、今日大抵の人々はかくの如き傾向の瀰漫しきっている内に生きているところから、それを實際以上に根底のある物と思いなし、人間本来の性情から切りはなし難い物でもあるかのように見ていいらしい。

しかしながら、新しい物の偏重、古い物の偏軽は、決して人類の歴史と共に古いものではない。日本に於ては僅かに一世紀足らずを、ヨーロッパに於ても高々二三世紀を過去へ引き返せば、それまで人類は何よりも先ず、因襲や伝統を尊重していたのである。しかも、それが因襲や伝統であることの故に、その前に脆いていたのである。先王の道と云い、祖先の遺風と云うようなものが、權威の上の權威であったのは、今の時代の新事物崇拜に対する過去の時代の旧事物崇拜を意味するものでなくして何であろう。

新事物を価値ありとし、優れりとしている今の時代の人々も、實際上の事実としては旧時代の旧事物をなつ

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

「新しい」「旧い」の問題

かしみ、よろこぶ場合がないではない。ただ、その場合、彼等はそうした懷旧好古の情を、十分道理にかなわないものででもあるかの如く、幾分恥じらうようにさえ見えるのである。

これに対して、過去の時代の人々も、實際上の事實としては、新奇なる事物に興味を有つたり愛着を感じたりした場合がないではない。ただ、その場合、彼等はそうした興味や愛着を、ややもすれば是認されにくいもの、従つて成るべく抑制されねばならぬ欲情として考えていたかのようである。

すなわち、今日に於ては、人々が新事物を新事物なるが故に尊重しなければならぬと考えていた。そしてそのように考えた間は甚だ長い。

過去の時代に於ける旧事物崇拜が、旧時代的先入見の一にすぎなかつたとすれば、今の時代に於ける新事物の崇拜もまた、近代的迷信の一にすぎない。

新事物崇拜の起源

旧事物崇拜についてはしばらく措き、新事物崇拜と云う近代的迷信は如何にして起つたか。ヨーロッパに於ても高々二、三世紀以来のものであり、日本に於ては僅かに一世紀足らずしか過去にさかのぼることの出来ないものである、その近代的迷信は如何にして生じたか。

それを明らかにする為には、私達は先ず、近代に至つて自然科学が俄かに長足の進歩をし出したという事実に注意を払わなければならぬ。

科学上の種々なる大発見や、科学に基盤を置いた種々なる大発明も、勿論非凡なる人物の非凡なる努力の結果である。そしてその努力には、発見者発明家の非凡なる個性が十分に發揮されている。けれども、こうした

努力の結果であるところの発見発明の内容その物には、その人間の個性があまり鮮かに刻みつけられているとは云えない。むしろ、殆んど非個性的であると云つてよい。

精しく云うと、釈迦や、孔子の如き宗教家道徳家の場合にあっては、それらのすばらしい仕事が、それらの仕事をした人々の比類なき天才的個性を印刻されている故、他の人々がそれらの仕事を見ならい、聞きならないで模倣踏襲して見たところで、実質的に同一価値を有するものを産み出すことは容易に出来るものでない。ダンテや、シェイクスピアやゲーテの如き芸術家の場合に於てもやはり同様である。然るに、自然科学上の発見や、自然科学に土台を置いた発明などをした人々の場合にあっては、その発見や発明の内容その物に個性が殆んどないからして、一たびその学説を聞き知り、その方法を見習つたや否や、それほど非凡の人物でなく、むしろ尋常一樣の学者技術家といえども、たやすくその発見者発明家と同じレヴェルに立つて仕事をすることが出来るのである。のみならず同様に非凡の天分を有する学者技術家等であつたならば、彼等はその先駆者等の発見発明を踏台にして、更に新しき発見発明をなし加え、結局に於て先駆者等より一段高い科学的見地に立ち、一層広い利用の世界を支配することさえも出来るのである。

かくして一の発見のあとに、今一の、より善き発見が現れ、一の発明のあとに今一の、より立派な発明が現れ、殆んど停止するところなく相繼いで行くのを見た時、近代の人々はやがて感じはじめた——時代の進行につれて、人間はいよいよ、より善く、より立派な仕事をするようになるということ、そしてそれ故に、前に生れた者よりも、後に生れた者ほど、気の利いた、賢い、すぐれたものであるということを。

ところで近代の人々は、神を礼拝する以上に、或は神を礼拝する代りに科学を礼拝するようになつていていた故、科学及び科学的発明の世界に於て彼等の体験したところの物は、他の世界に於ける一切の事物にまで推し及ぼされた。即ち彼等はついに世上万般の事物に於て、前に出たものよりも後に出了るものの方が、旧いものよりも

「新しい」「旧い」の問題

新しいものの方が、より大なる価値を有つてゐるかのように考えるところの、牢としてぬきがたき一の先入見を、一の近代的迷信を造り上げてしまつたのである。

新事物崇拜という近代的迷信は、十九世紀中葉以後に勃興したところの生物進化論、及びその應用であるところの社会進化論を、俗衆が穿き違えたことによつて、一層強められて來てゐるようにも見える。

改めて云うまでもなく、生物進化論は、所謂高等生物が下等生物から漸次進化して來たものであると、そう説明するに止まつてゐる限りに於て正しい。総ての生物が種属としても個体としても、常に下等な物から高等な物へと進化しつつあるもののように言つたり、生物の或る物がしばしば進化するよりもむしろ退化していたことの、退化しつつあることの事実を無視したりするならば、それは生物進化論に似て非なるものであり、生物進化論をねじ曲げたところの俗論である。

生物進化論の應用であるところの社会進化論も、所謂文明の社会が野蛮の社会から漸次進化して來たものであると、そう説明するに止まつてゐる限りに於て正しい。総ての社会が、全体としても各部分としても、常に文明の低度なものから文明の高度なものへと進化しつつあるもののように言つたり、或る社会がしばしば進化するよりもむしろ退化していたこと、退化しつつあることの事実を無視したりするならば、それは余程の念入りに間違つた社会進化論であると云わなければならぬ。

だが世間の俗衆は生物進化ということをも社会進化ということをも、そうした念入りに間違つた意味に於て受け取つたのである。そして事物の変遷推移はつねに低級なものから高級なものへの発達進歩であると考え、あとから出る物は、つねに前に出た物よりも優秀であり、より大なる価値を有つてゐると考え、新しい物は常に旧い物よりもまさつてゐると考へるようになつて來たのである。

かくして出来上つたところの新事物崇拜と云う一の近代的迷信は、一の既に出来上つた迷信として私達の国

へ輸入されて來た。私達日本人はそうした迷信を自ら産み出したのであるよりも、むしろ欧米人から教え込まれたのである。

だが、そして欧米人から私達日本人にまで教え込まれた迷信が、この日本へ来てからまた、特殊の發展を遂げたことも忘れられてはならぬ。

けだし、黒船と共ににはいって來たところの舶載の物質文明は、私達日本人を魅惑し去り、私達日本人をして直に考えさせた——日本在来の物は到底外国から輸入されて来る物に及ばないようだと。日本在来の物はやがて旧い物であり、輸入されて来る物はやがて新しい物である。即ち、旧い物は到底新しい物に及ばないと云う輸入の迷信は、ここに今一のシンニュウをかけられたわけである。

黒船來航以来、六、七十年ほどの間に私達日本人は、欧米人が二、三世紀をかかつてなしとげたところの「社會進化」をなしとげた。その速度の比例がやがて、新事物崇拜という近代的迷信の猛烈さの比例である。恐らくこの現代の日本人ほど、旧い物を斥けて、新しい物を迎えることに狂熱的態度を見せたものは、人類の歴史あつて以来、世界のいづくの果てにも見出されなかつたであろう。

退化としての新事物

今日に於ても、極めて少数の一部の人々は、總ての新しいものが、總ての旧いものより優つてゐるとも思つていないのである。しかしながら、時代の先入見は彼等自身が意識しているより以上に彼等をとらえて居り、謂われなき新事物崇拜を苦々しく思う心持をあるかなきかにしてしまつて居る。そしてややもすれば彼等をして、原則としては新しい物が旧い物よりも優つてゐるかも知れないと云うような、心細い事を考えしめている。勿論、特に悲観主義的な世界觀を抱いてゐる者でない限り、大抵の人々はこの世界が、この宇宙に遍満する

SAMPLE
Shoshi-Shiraku.com

「新しい」「旧い」の問題

ところの大生命が未完成から完成へ向つての途にあると云う風に考えることを、強ち拒否しようとする。私達も、そうした生成を、より完全に近い物への絶えまなき進行を決して疑うものではない。

しかしながら、より完全に近い物への絶えまなき進行は、専ら全体としての世界、全体としての宇宙、全体としての大生命に関して云わるべきであって、世界に、宇宙に、大生命に部分をなしているものに関して云わるべきでない。ナイルの川は、全体として南から北へと流れている。けれども、その小さな部分々々に就いて云えば、その水は東に折れ、西に曲り、時としては北から南に逆流してさえもいるのである。

存在全体に関しては、私達もゲーテと共に「あること」と「あるべきこと」との一一致を信ずるに躊躇しない。

けれども、プロイセンの政治（ヘーゲル哲学を大変に重宝がつたところ）だと、マルクス主義の社会運動だと、資本主義經濟組織だとか、一の種属としての人類だと云うような、個々の物に関して云えば、所謂定立、反定立を通して綜合へ進むと云う風にいつも好都合には行かないかも知れない。時には定立、反定立の対峙をさえ見るに至らずして、お仕舞になつてしまふかも知れない。如何なる子供の中にも、その両親が「止揚」されているとは云えないかも知れない。全然子供を有たないでしまふ人間、妻をさえ有たないでしまふ人間もあるかも知れない。

諸の事物は、常に完成への道程にあるのではない。総ての新しいものは、総ての旧い物に対して進化を意味しないで、時には立派に退化であり、衰亡絶滅であり得る。

要するに、総ての後に出たものを、総ての前に出たものより価値ありとするのは、全部に関する考察と部分に関する考察との混同である。

SAMPLE
Shoshi-Shinsu.com

はやく生れておそく死ぬるもの

新しいと云い、旧いと云うのが、後に出たと前に現れたとの区別を言うのでなく、むしろ、今なお生きているものと、既に死んでいるものとの区別であるとすれば、総ての新しいものに価値があり、総ての旧い物に価値がないとするのは正しい。

ただ、その場合に於ては、生れて間もなく死ぬものもあれば、非常に久しく生きるもの、殆んど永久に生きるものもあって、総ての人格、総ての事物に命数の定していないと云うことが忘れられてはならない。

例えば文芸に於て、日本の近頃の人々などは、多少なり文壇の注目に値するような作品を二、三ないし十ばかりも書いて、所謂大家になったり、流行児になつたりする時分には、そろそろもう本当の生命を失いかけているのが常である。何と云う果敢ない命、何と云う果敢ない新しさであろう。

だが、シェイクスピアや、ダンテや、ホーマーなどは、あんなにもはやく生れて来て、あんなにも久しく、何時までも死なないでいる。ついに永久に死にそうにない。永久に新しさを失いそうにない。

げに偉大なる者は、天才者は永久に若々しく、永久に新しさを有つてゐる。否、永久の若々しさ、永久の新しさを有つていればこそ偉大なる者であり、天才者であるとも云うべきではないか。

年少なるが故に、熱情的である代りに洞察を欠き、老齢なるが故に、聰明である代りに旺盛なる氣力を欠くという如きは、凡庸なる人々の場合にのみ云われる事である。偉大なる者、天才者にあつては、ゲーテの告白に見えるが如く、年少にして未だ経験せざるところのもの、後日に至つて生活るべきところのものが既に描かれて居り、ラスキン、トルストイの伝記に見えるが如く、老来いよいよ崇高なる感激と熱狂とを加えて、謂わば益々年少者らしくなつてゐる。余りにも文芸家の年齢を口にするもの、田山花袋氏、菊池寛氏の如き、失

「新しい」「旧い」の問題

礼ながら単に氏等自身の事を語つていられるに過ぎないと云つてよい。

いたずらに、戸籍簿に於ける、ないし文士録に於ける生年月日を穿鑿して五十代よりも四十代の人々が新しく、四十代よりも三十代の人々が新しく、三十代よりも二十代の人々が新しいと言い、或は昨年から書き出した人々の物が、一昨年から書き出した人々の物より新しく、今年書き出した人々の物が昨年書き出した人々の物より新しいと言う如きは、芸術が天才者の仕事であるべきことを思わず、天才者が永久に若々しく新しきものであることを知らざる、群小駄評家等の駄常識でなければならぬ。

仮りに、ある芸術家が人として永久に若々しさと新しさとを保持することが出来ないで、遂に老衰し老朽して、本当の生命のないものに、本当に「旧い」ものになってしまったとしてもよい。彼がそのように「旧く」なるまでに成しとげて置いたところの仕事は、それが一たび本当に生命のある本当に「新しい」ものであつた限りに於て、なお且つ永久に生命のある、永久に「新しい」ものであることを失はないであろう。

その人の老いたるを見て、その人の過去の業績もまた旧くなつたかの如く思いなすのも、痛嘆すべき時代の悪風潮の一である。

時代に引きずられ行く新しさ

「新しい」「旧い」は、時代に交渉があるとないとの区別でもあり得る。そしてその意味に於て新しい物が迎えられ、旧い物が斥けられるのはあるべき事である。

だが、その場合、時代に引きずられて行くのも、時代に支配されて行くのも、時代との交渉であり、時代を引きずって行くのも、時代を支配して行くのも同じく時代との交渉であることが注意されなければならない。

車掌台にやつと乗せて貰っているような、線路の大きな曲角へ来たときややもすればふり落されてしまうよ

うな危なつかしい乗客は、車内にちゃんと腰をかけている普通の乗客以上にさえ、その電車と密接な交渉をもつてゐるらしく見えるかも知れない（特に、電車の外から電車を見ている人達の目にまで）。

曳船の船を曳き上げている陸上の人々は、遠くから望見している人々にまで、その船と何等の交渉もないもののように見えるかも知れない。なぜならば、その間を繋ぐ強靭なる索は、強靭なる割合に大きく太く造られていないからである。

すなわち、単に事物の皮相を見るばかりで、その真相を洞見することの出来ない愚衆等は、大抵の場合、時代に率いられる者をのみ時代に交渉ありとし、時代を率いる者が、更により深く時代に交渉していることを心附かないでしまう。むしろ時代に没交渉であるとさえ早呑込みをしてしまう。

今の時代にあつては、時代のあとに附き従つている者、息をきらしながら流行を追うてゐる者は、その事の故に新しいとされている。何と云う無価値な、下らない、みじめな新しさであろう。

今の時代にあつては、多少なり（時としては五年なり十年なりを、また時としては五十年百年以上をも）時代に先んずることによつて、所謂季節はずれとなることによつて、時代をより善き時代へ引き上げて行こうとするところの者は、その事の故に旧いとされている。何と云う立派な、価値のある、尊敬すべき旧さであろう。

ニーチェもトルストイもそうした意味に於て常に旧かつた。彼等自ら総ての事に於て、出来得る限りの旧さを求め、その旧さの上に生きて行こうとしていた。その旧さが世俗をして彼等の生活と、思想と芸術とを無視せしめ、黙殺せしめ、冷笑せしめ、迫害せしめた所以であり、私達をして彼等の偉大を景仰おく能わざらしめる所以である。

バルザックがその作中の人物を、殊にそれらの婦人を描いた時、それらの婦人はまだフランスに生れていたが、彼の小説の行われるにつれて次第々々にそれらの婦人を見るようになったと云われている。バル

ザックの新しさは、本当の新しさであった。

オスカー・ワイルドは芸術が自然を模倣するのでなくむしろ自然が芸術を模倣するのだと言っている。その場合に彼の挙げたところの例証は拙劣すぎるけれど、しかし彼の直観し得たところの論旨に間違いはない。即ち、芸術が真実の芸術である限り、それは一の先見であり、予言であるが故にそれを受け容れるところの社会と個人とに、針路を与える模範を与えて、その芸術の世界に近く生活せしむるに至るべきは極めて自然の事である。この点に関して云えば、ワイルドもまた、何が本当に新しいか、何が本当に旧いかを十分に知っていたと云えるであろう。

息を切らしながら、流行を追っかけて廻るような新しさは、たゞま忽ちにして旧くなり、しかも再び新しくなることの出来ないような、気の毒な人々の新しさである。

或る意味に於て季節はずれであり、それ故にこそ一層力強く時代に交渉しているような人々は、いかほど時代が推移して行こうとも、それぞれの時代に対して、つねにそうした不即不離の交渉を保つて行くものであり、従つて常に旧くして新しいものである。一口に云えども、本当の新しさをいつまでも持ちつづけて行くのである。今の芸術界及び思想界に於ける群小駄評家等よ、卿等が何等かの芸術もしくは思想を、新しいと云つては無茶苦茶に歓迎し、旧いと云つては一も二もなく唾棄し去る前に、卿等は先ず以上の事理を思料の中に加えることを忘れざれ。

新事物に対する関心の意義

後に現れた物が、前に出た物に比し、必ずしも優つたものでないことの明白なる場合、単に新しく出現したというだけでどれだけ価値があるかも知れないような、思想界及び芸術界の新現象新事物に対しては、そもそも

も全く無関心でいることが出来るものであろうか。少なくとも、立派な価値を証拠立てられたる過去の現象事物に対する関心とは、比較にならないほどの些細な関心をのみ有つて出来るものであろうか。

ある人々には、たしかにそれが出来るもののようにある。けれども私達にはそれが出来そうにもない。それは何故であるか。

私達は、言葉の正しい用い方に於て、現實に生きて行く為には、何よりも先ずその私達の時代に生きなければならぬ。そして私達の時代に生きる為には、何よりも先ずその私達の時代の趨勢に対して無関心でいられない。しかも私達が特に思想界ないし芸術界の人間である限り、何よりも先ず、思想界ないし芸術界に現れるところの時代の趨勢に対して無関心でいられない。そして思想界ないし芸術界に現れるところの時代の趨勢を得し、且つ然るべき私達の態度を決定して行く為には、価値のあるにもせよ、或はないにもせよ、先ずその処に統々姿を見せて来るところの新現象新事物に触接し、それを「生活」して見ることが必要なのである。

いやしくも所謂思想家芸術家にして、思想界芸術界に姿を見せて来るところの新現象新事物に対し、全然無関心でいられるのは、思想界芸術界に現れるところの時代の趨勢に対して、否、時代その物に対して無関心でいられるからである。しかも、自己の属している時代に対して無関心でいられるような人々が、結局本当に生きていかないということ、その思想も芸術も本当の生命を有つていかないということは、改めて説くを須いないのである。

しかしながら、私達が思想界芸術界の新現象新事物に関心し、興味を有し、触接に努めると云うのは、あながち過去の旧現象旧事物にあきたらなくなり、その不満の箇所を新現象新事物に満たそう為の物ではない。従つて定評ある過去の天才者等に近いような、それほど立派な何物をもそこに見出し得なかつた場合にも、私達は必ずしも私達自身の努力が全然無益であつたとは考へないのである。

「新しい」「旧い」の問題

例えば、私達がシュペングラーを読んで見ようとするのは、読んで見なければならぬと思うのは、トルストイやニーチェに於て満たされなくなつた何物かを、シュペングラーに於て満たされるだらうと期待するからではない。私達がカイザーや、トウラー、ウンルーや、ポール・モーランや、イバニエスや、甚だしきに至つてはキリスト伝の著者としてのパピニをさえ読むことの必要を感じるのは、ドストエフスキーや、チエーホフや、ストゥリンドベルク（ストーリン）なぞの作品がもはや、私達の胸にまでぴたりと来なくなつて来たからと云うわけでも何でもない。私達はただ、それらの新しい人物と新しい作品とを通して、最も新しい時代の流れにひたり、厳密に私達のこの時代に生きようとしているのに過ぎないのである。若し、新しい人物と新しい作品とに対する半ば好奇的な関心を、直に過去の天才者とその偉大なる事業とに対する不満ででもあるかのように解釈するものがあれば、それは甚だ間違った考察であり、若し、嗜好の新しさを誇張して、自己の思想と芸術とがまだまだ旧くならないでいるように思われようとするものがあるならば、それは余りにも浅薄な努力であると云わなければならぬ。

（トルストイや、ドストエフスキーや、チエーホフなぞが一向に興味をひかなくなり、單だ新しい芸術家の某々なぞが本当に共鳴し得られるというような事を、二、三ヶ月前の「新潮合評会」に於て述べている廣津和郎君の意見の如きは、この場合当然引き合いに出すべきであるが、そうそう引きつづいて、廣津君を問題にするのもいやだから見合わせる。）

前節に於て述べたる如く、時代との最も善き交渉が或る意味に於ての季節はずれを必要とするならば、私達のこの時代に最も善く生きて行く為にも、私達は時代に對して、思想界芸術界に現れるところの時代の趨勢に對して、即ち新しき人物及びその事業等に對して、折々無関心になることが出来なければならぬ。なぜと云つて、私達は單なる新事物の追蹤者であることを免れる為にも、時あつては当面の新人物と新事業とから目をそ

らして、永久に若々しく新しいところの、過去の天才者とその偉大なる事物とへぶりかえり、そこから学んでも来たところの標準によつて、否、それから創出したところの私達の尺度によつて、自由の、独立の批判と評価とを加えるようにならなければならないからである。

これを要するに、一切の新事物に対して、全然無関心であるというのは、何等の誇るべき事でもない。と同時に、余りにも狂奔して所謂新しき思想と新しき芸術とを追う者も、また新時代のまことの生命を捕捉し、それを十分に噛み碎き、それを十分に味わい尽し、それを十分に自己の物となし了せることは出来ない。

「新しい」「旧い」の問題——これが如何に旧くして、しかもまた如何に新しいものであるかを思わない人々よ。そして私の言葉の如何に旧くして、しかもまた如何に新しいものであるかを理解し得ない人々よ、諸君はついに本当の「新しさ」に対して永久に無縁の衆生である。

(1925.1)

SAMPLE
Shoshi-Shift.com

「近代」派と「超近代」派との戦

テーズは、如何なる文芸でもが、その文芸を産んだところの時代を反映している故、或る時代がどんな時代であったかを知る為には、その時代の文芸がどんなものであつたかを吟味して見ればよいと考へた。

この考え方自体は決して間違つた物ではない。しかしながら、これからほんの一歩を踏み出して、或る文芸がどんな文芸であるかを知る為には、それを産んだ時代がどんな物であるかを吟味して見ればよいと、そんな事をでも考へたとしたら、それは忽ちにして大変な誤謬に陥つてしまふであろう。

なぜと云つて、本当の文芸（一般に藝術と云つても構わない）はその文芸を産んだところの、その文芸が属しているところの、時代を反映しているばかりでなく、更に来るべき次の時代——より近き、並びにより遠き——をも予感し、構想し、規定していなければならぬからである。

単にその時代から働きかけられているだけで、次の時代へいささかも働きかけて行かないのは、結局非常に卑近な意味に於てでなければ、私達人類の生活に役立たないもので、謂わば低劣なる文芸であり、本当の藝術であるよりもウソの、偽りの藝術であり、藝術であるよりもむしろ單なる遊戯である。

さて日本の現在の文芸界を見るに、小説に於てはもとより、脚本に於ても、詩に於ても、その他如何なる形式の物に於ても、それを産んだ日本の現在の時代を、十分に、時には十以上にさえ反映していないような作

品は一もない。単にこれ等の作品のめぼしいもの若干が保存されているだけでも、後代の洞察力ある歴史家は、今の時代がどんなに浅薄な、どんなに低劣な、どんなに俗悪な人間共の舞台であったかを描き出す上に、何等の困難を感じないことであろう。

だがそれらの作品の中、卯^うの毛ほどでも来るべき次の時代を、次の人類生活を予感し、構想しもしくは規定していると云えるようなものが、そもそもどれだけあるであろうか。

それは勿論絶無ではない。のみならず、こうした作品を未だ書き得ていないまでも、少なくとも書こうと志している人々は、それほどまれではないようと思われる。（これは特に、所謂社会問題に衷心からの興味を有つてゐる人々の場合にあてはまる。）

しかも彼等の大抵が、右の如き作品を書こうと志し、時には十分書き得たときえ自信しているにも係わらず、事実はやはり現前の時代から働きかけられているにすぎないような作品ばかりを書いて居り、多少にても将来の時代へ働きかけて行くような、如何なる作品をも書いてはいないのである。

それは何故であるか。

彼等は今の時代の全体に対して、もしくは今の時代に根本精神をなしてゐるところの物に対して嘔吐感を抱くことが甚だ足りないので、今の時代の一角を、もしくは今の時代の一傾向を否定すると共に、天晴れ今の時代から奇麗にぬけ出してしまい、新しい次の時代に生きているという風に自ら信ずるにもかかわらず、實際にはただ今の時代の一の片隅から他の片隅へ移つただけであり、今の時代に属する一の思想を捨てて他の思想を取つただけであり、結局まだまだ本当に次の時代を予感し、構想し、規定し得るところまで來ていなかからである。

「近代」派と「超近代」派との戦

今の時代の底の底を流れている、またその脊髄となつてゐるところのものは、所謂近代精神であり、近代主義である。

近代精神は三、四百年を費して成長し円熟した。円熟の峠を通り越して、頽敗の阪を下りはじめてからでもだいぶになる。

近代精神がかつて、人類の文化をすすめてくれたことの功績は、総ての人々から承認されねばならないところのものである。と同時に、今やこの近代精神と、それから出て来るさまざまな近代的事物より以上に、我々人類に禍しているところのものを、そもそも誰が挙げ得るだろうか。

近代精神を最も簡単なる言葉に代表させるならば、それは人間主義もしくは人性主義である。

人間主義もしくは人性主義(Humanismus)はもと、イタリア復興期に於て、ヘブライ的キリスト教的、中世的、神性的事物に対する、ギリシア的異教的、古典的、人性的事物を追求し研究しようとする学界思想界の新風潮に名づけたものであるが、しかし、その意味を今少し拡大して、右の新風潮から最初の、且つ最大の影響を受けたところの近代精神その物を表白する用いて見ても、格別の差し支えもなさそうで、むしろかなりに便利らしくさえ見えるのである。

今の時代の根本精神、即ち近代精神を、神性主義に対する人性主義として見る時、それは神及び一切の神性的なものの存在を、もしくは、価値を否定するので、一方に於ては、神的な人間というようなものはあり得ないことになり、もしくは、あり得ても何等の尊重を値しないことになつて来る。換言すれば、唯だ凡庸な人間だけが実際に存在し得ることになり、もしくは人間の凡庸さが何等の軽蔑すべきものでも恥ずべきものでもなく、むしろ堂々と横行闊歩していくものになつて来る。即ち民主主義的平等主義的傾向である。

更に、神性主義に対する人性主義は、神及び一切の神性的なものの存在を、もしくは価値を否定するので、他

方に於ては、神的な世界というようなものはあり得ないことになり、もしくはあり得ても何等の尊重を値しないことになって来る。換言すれば、唯だ外的な、唯だ所謂物質的な世界だけが実際に存在し得ることになり、もしくは世界の外的性、唯物性が何等の痛ましき事でもなく、むしろ大いに悦ばしく楽しき事になつて来る。即ち実証主義的傾向である。

人性主義の両面であるところの、この実証主義的傾向と、かの平等主義的民主主義的傾向とから、種々雑多なる所謂近代思想が出て来ている。或るものは、専ら或る一つの傾向から出ている。或るものは、主として或る一の傾向から出ている。更に或るものは、主として何れの傾向から出ているとも云われない。ともあれ、この二の傾向のいずれにも全然基礎を置いていないような思想は所謂近代思想でなく、この二の傾向のいずれかに、何等か流れを汲んでいる限り、一見旧すぎるような思想も或は一見新しすぎるような思想も、悉く皆所謂近代思想のほかかる何物でもあり得ないのである。

実証主義が科学の進歩及び器械の発明を促し、その科学の進歩及び器械の発明がまた、実証主義的傾向を助長し、かくして互に影響し合つてゐる内に、自からにして科学万能の思想や、器械崇拜や粗悪なる唯物論や、挙金主義なぞが生れて來たことは、わざわざ細説するを要しないであろう。

主として器械の発明から起つた所謂産業革命は、商業主義を資本主義にまで爛熟せしめると共に、漸次近代の大都市という人類の不自然なる密集生活を出現せしめ、その密集生活の怪しげなる便利さと、それを醜く飾つてゐる、いたずらに複雑でいたずらに多彩なばかりの造花的文明とを有りがたがるところの、都會謳歌を、文明崇拜を生ぜしめた。

この都會謳歌及び文明崇拜については、それらのものが近代思想としての新しさ以上の、如何なる新しさをも有つていなきことを、最も先ず注意すべきである。

「近代」派と「超近代」派との戦

同じく一の単なる近代思想として、特に主として実証主義的精神の頽敗から出たものとして、資本主義と非常に多くの共通点を有っているのは、マルクス派の社会主義である。より広く云えば、資本主義と同じく、科学万能を信じ、器械を崇拜し、資本主義と同じく、大都会及びその文明を謳歌し、資本主義と同じく貨幣価値以外の如何なる価値をも認めないところの、自ら科学的社会主義と名乗っているところの社会主義である。

社会主義は資本主義の敵であるより以上にその味方である。或は社会主義と資本主義との争いは、あかの他人の争いではなくして、むしろ骨肉近親の間の争いである。それは何よりも先ず財産の分配についていがみ合っているところの兄弟二人を連想させる。

社会主義と資本主義とが兄弟であっても、その父母いすれをも同じゆうしているのでないということ、精しくは一方が父母いすれをも分明に知られているのに対して、他方が所謂てでなし児であるということは承認してもよい。

すなわち、資本主義は単に実証主義的精神という母から生れたことだけが明白であるのに対し、社会主義は実証主義的精神といふ母と、平等主義的民主主義的精神といふ父との並び存することをはつきり示している。

しかしながら、この平等主義民主主義的精神なるものは、社会主義にとつても実証主義的精神ほどに重要な、もしくは根柢的なものではないように思われる。

なぜと云つて、唯物史観や唯物論（この二を切りはなし難い物と考えても、考えなくてもよいのだ）の上に立つてゐるマルクス派の社会主義者等は、しばしば考へ、そして口にする——資本主義は資本家を幸福にするだけそれだけ労働者を不幸にしてゐる。すなわち、それは資本家階級にとっての正義であると共に、労働者階級にとつての不正義である。そして自分達が資本主義を否定するところの社会主義（彼等は大抵、資本主義を

否定するのは自分達社会主義者ばかりだと、僭越な事を考へてゐる！）を唱えるのは、自分達が偶々資本家階級に属しないで、労働者階級に属してゐるからである。

平等主義的民主主義的精神の頽敗した形が、如何に始末の悪いものであるかはしばらく置く。大抵の社会主義者等はこの精神をすら單なる口実として利用するに止まり、衷心から何等の信奉をもなしていないのである。そして彼等の社会主義の本質は、結局資本主義その物の否定であるよりも、彼等自身を資本家にしてくれないところの運命への呪咀なのである。

社会主義について有名なる近代思想の一は、所謂婦人解放の思想である。

婦人をして全然男子と同一の権利を有たしめ、全然男子と同一の生活を営ましめようとする意味での婦人解放は、事實上の主要動因は産業革命による婦人の社会的地位の変移にあるのだが、理論上の第一の出発点は近代の平等主義的精神にあるのである。

最善の意味に於ては、差別的になればなるほど平等的になり得るもの、またならねばならぬものながら、むしろ差別の反対物としての平等をのみ偏重しがちであったところの近代の平等主義的精神は、各人のそれぞれの個性を生かしてやることが、本当に彼を自由にしてやることであるのを知らなかつた如く、男子に対する婦人の性的特質（不自然なる人為的歴史的差別から見たのでなく、もつと先天的本來的な）を發揮せしめることが、本当に彼女を解放してやることであるのを知らなかつた。その結果は、私達の眼前に見ている如く、婦人を男性化したり男子を女性化したりするような奇怪なる現象となつて現れてゐるのである。

最も頽敗した形に於ける実証主義と共に、社会主義思想が少なくともヨーロッパ及びアメリカに於ける、一般民衆の骨髓にまで染み込んでしまつた如く、最も浅薄な、最も粗悪な意味に於ける平等主義と共に、婦人解

「近代」派と「超近代」派との戦

放思想が、少なくともヨーロッパ及びアメリカに於ける一般民衆の間に、殆んど公理の如く斥けがたいものとして受け容れられてしまつてゐる。

それにしても、社会主義思想がそれほど普及しているにもかかわらず、資本主義と異なる全然新しい原理の上に立つところの、全然新しい社会は何故に現れないものであるか。曰く、社会主義思想の根柢になつてゐるところの精神が、そのまま資本主義を支持しているところの精神であり、社会主義思想その物の存立している限り、資本主義もまた、根本的に崩壊するということは到底あり得ないからである。

又、婦人解放思想がそれほど蔓延してゐるにもかかわらず、婦人がいささかもより幸福にならないのは（男子がより不幸になつたことは言うまでもない）何故であるか。曰く、婦人を出来るだけ婦人につすることが、出来るだけ彼女を人間にすることであり、出来るだけ彼女を自由にすることであり、そしてそうするよりほかに、彼女を出来るだけ男子と平等にし、男子と同じように幸福にすべき、如何なる方法もあり得ないからである。

婦人解放や、社会主義や、文明謳歌や、都會讚美や、専門主義や、器械崇拜や、科学万能なぞの如き近代思想は、これらの近代思想に根源中軸となつてゐるところの実証主義的並びに平等主義的傾向は、一口に云えば人性主義という近代精神、近代主義は、もはや人類を向上させるよりも、むしろ墮落させ滅亡させることの方に役立つてゐる。

すなわち、人類はこの滅亡を免れ、この墮落から回復することの為には、一切の近代的な思想や、傾向や、精神を捨てて、全然新しいもの、謂わば超近代的なものを取らなければならぬ。

そして特にヨーロッパ及びアメリカに於ては、一般民衆にとつての新しさが「近代」的であることであるのに対し、少数識者にとつての新しさは、「超近代」的であることである。

近代的な一切の事物に対する堪えがたき嘔吐感から出発しているだけに、超近代主義は一応近代主義の単なる否定の如く、単なる反対物の如く見えるかも知れない。けれども実際は近代主義からあとへ引き返したのはなくして、さきへ通りぬけてしまったのであり、所謂超克したのである。即ち超近代主義は人性主義精神の単なる否定や反対物であるよりもむしろ人性主義精神の超克されたものであり、実証主義的及び平等主義的傾向の単なる否定や反対物であるよりもむしろそれらの傾向の超克されたものであり、従つて大抵の近代思想の単なる否定や反対物であるよりもむしろそれらの思想の超克されたものである。（この場合、総ての近代思想に関してこの事を言うに躊躇するのは、余りにも頗敗的な或るものに対しては、単なる否定と反対物とをほかにして、如何なる超克らしいものをも考へることが出来ないからである。）

科学及び器械については、それらのものを強ち斥けるのではないけれど、それらのものを礼拝するような態度を全然取るまいとする——これは超近代的である。

商業主義よりも重農主義を、都会よりも村落を、文明よりも文化を、西洋よりも東洋を（単なるセンチメンタリズムからでなく、「近代」生活に対する最も深刻な批判の結果として）撰び取ろうとする——これは超近代的である。

単純化に対する複雑化の偏重を、綜合に対する分析の偏重を、経験に対する実験の偏重を、ないし人間（ナポレオンがゲーテを見て、「人間」を見たと言った時の如き言葉遣いに於て）に対する専門家の偏重を斥けようとする——これは超近代的である。

社会主義が存続する限り、その兄弟分なる資本主義もまた存続するであろうこと、並びに婦人を本当に解放する為にはさしあたり「婦人解放」という近代的謬見から解放してやらねばならぬということを知つてゐる——これは最後に、けれども最も著しく超近代的である。

「近代」派と「超近代」派との戦

トルストイや、ドストエフスキーや、ストリングベリー、ニーチェや、ラスキンや、モ里斯や、ペントレー、カーペンター、これらの人々がそれぞれに、さまざまな近代的事物に対し、如何に堪えがたき嘔吐感を抱いていたことか。近代主義に対する超近代主義の戦いを、如何に勇敢に、如何に狂熱的に、如何に死物狂いに戦っていたことか。

十九世紀の末より今日にかけて、人類文化の重要な問題に関し、明白に超近代的な思想をひっさげて立ち、明白に近代的な思想を破却し去ろうとしたところの、ただ一人の大なる思想家、ただ一人の大なる芸術家でもあるであろうか。

すなわち、今日にあつては、単に今の時代から働きかけられているだけでなく、更に次の時代へ働きかけても行くような芸術を産み出すべく、人は先ず超近代的な、根柢的に新しい精神に生きていなければならぬのである。

開国以来の日本の文芸界に於て、思想的内容の方面から出発した、また少なくともその意味での根柢的な運動として重要なものは、遠くは所謂自然主義のそれであり、近くは所謂プロレタリア文芸のそれである。

この場合、人は白権派の所謂人道主義を想い浮べるかも知れないが、しかし私がかつて命名した如く、またやや有名になりすぎた如く、あの「自然主義前派」は思想上明白に自然主義以前（単に時間的にのみ云うのではない）の物であり、又あの程度の人道主義的・思想ならば、徳富蘆花氏や木下尚江氏などの小説によつて、日露戦争前後にも、かなりに代表され表白されていたのである。

白権派が文芸史上に何等かの功績をのこしたとするならば、或は少なくとも、何等かの影響を後の文芸界に及ぼしたとするならば（その影響が悪影響であつたか善影響であつたかは別問題として）、それは思想的内容に

於てであるよりも、むしろ表出表現の形式に於てであった。この点に於て、またこの意味に於て、自然主義とは無論のこと、プロレタリア文芸とすら同日に談ずることが出来ないほど、それほど根柢的な運動と反対なものであつたのである。

かなり根柢的な運動としての所謂自然主義は、その評論とその創作との二を通して、空前絶後の大規模に於てさまざまな近代思想を宣伝した。あの運動が序に、偶然に取次いだものは別として、少なくともわざわざ志して輸入したところのものは悉く皆、実証主義的傾向から、並びに平等主義的（特に、凡庸主義的、賤民主義的）傾向から生れ出たところの近代思想であつた。

しかしながら、あの頃の日本人にとっては、それらの近代思想を輸入したのが、必ずしも悪い事ではなかつた。むしろ、多少の弊害を伴つたとしても、全体としては可なりに有意義な事であつたと云うべきであろう。

ただ、当時の自然主義文芸が主として取扱つたのは、人間の社会生活に対する個人生活であり、それを通じて宣伝されたところのものは、殆んど唯大人間の個人生活に関する、個人的な問題に関する近代思想にのみ限られていたと云つてよい。（私は明治の末年に近く私自身が、自然主義を一通り卒業した当時の文壇に対して、謂わば心理学的興味のほかに、併せて社会学的興味をひくような、社会的な、社会問題的な創作の出現を、無益に期待して、無益にそうした意見を発表していたことの記憶を有する）。

三、四年前俄かに喧かまひすしくなつたところのプロレタリア文芸運動は、單なる表現の形式に関する問題から起つたのではなく、むしろ思想的内容に関する問題から起つたものとして、また少なくともその意味での根柢的なものとして、自然主義以来の注目すべき運動に属しているのだが、それは自然主義がついに踏み込まないで、そのままにして置いたところの処女地へ、かなり大きな新領土へはじめて踏み込んだ。新領土とは、人間の個的・生活に対する社会的生活を主題に取るところの文芸の謂いである。

「近代」派と「超近代」派との戦

しかしながら、プロレタリア文芸の折角開拓したるこの新領土に於ても、過去の自然主義の世界に於ての如く、主として近代的な諸思想ばかりが宣伝され、私の所謂超近代的な思想は、殆んど何一つ見出されなかつたのは、この上もなく遺憾な事である。

けだし、自然主義勃興とプロレタリア文芸唱道との間には、私達の日本もかれこれ二十年近くの歳月を経過している。あの頃の日本にとって大いに有意義であったところの近代思想の宣伝が、今日の日本にとっては全然無意義であり得る。あの頃の日本にとって、少なくとも我慢し得られたところの近代思想が、今日の日本にとっては到底我慢のし切れないほど、愚劣な、滑稽な、危険な、有害なものであり得るのである。

人類をプロレタリア、ブルジョアの二階級だけに、はつきり差別し得られると考え（生活に困っている自作農や小地主などをプロレタリア、即ち労働者階級に入れるか、それとも資本主義制度によって得をしている筈のブルジョア、即ち資本家階級に入れるか、どちらにしても滑稽事である！）、その差別を無暗に重要視しているのは、唯物論と唯物史観とに立脚するところのマルクス派社会主義者等の事であつて、資本主義を否定し破壊しようと志している者全部の事ではない。従つて階級意識を第一の要件とするプロレタリア文芸の唱道者等が、彼等の主張に同意しない私達を、資本主義の否定と破壊とに躊躇する者でもあるかの如く思いなすのは、彼等の不聰明から來たところの己惚的妄断たるに過ぎない。

又若しマルクス派社会主義と両立しないような社会問題的見地に立ちながら、プロレタリア文芸運動に参加しているものがあつたとしたら、それはだいぶ物の分らない文芸家である。でなかつたら、案外横着な文芸家であると云わなければならぬ。

ともあれ、プロレタリア文芸の主張は理論上当然、マルクス派社会主義の上に土台を置いている。

そして、生産に要する労働量（労働質に關係なく）がその生産物の価値を決定すると見るような、粗悪極まる唯物論的思想から、文芸上の傑作が生れ得るものと考えたり、所謂上部構造たるに過ぎない筈の文芸上思想上述作（マルクスの『資本論』なぞをも抱括して）なぞを、次の社会の土台石に加え、或は土台石を切り出してくる上に役立たせることの可能を信じたりするのは、だいぶ骨の折れる仕事のようである。

だが、それらの事はまあ、どうでもよいとしよう。さて、どうでもよいとするわけに行かないのは、マルクス主義に立脚したプロレタリア文芸が、思想上「近代的」である為に、表出形式の上にも、所謂技巧の上にも、甚だ超近代的になりにくい点である。

プロレタリア文芸の作品が、概して自然派的写実主義的に、ともすれば旧臭いと云われるような形式と技巧とで書かれていたのは、偶然的のように見えながら、その実甚だ必然的な事である。なぜと云つて、主として実証主義的傾向から生れた社会主義思想は、同じく実証主義的傾向から出て来た「描写万能」的な、客觀主義的技巧によつて表白されるのが、割鍋にじ蓋以上にもふさわしい事だからである。

表出形式としての技巧としての、表現主義、未来派なぞの所謂新しいさまざまな流派が、近代的でなくして超近代的であることは改めて云うまでもあるまい。その上、それらの傾向の出現を余儀なくしたところの根本的思潮が同様に、必ず何等か近代的なものへの嘔吐感に出発していることもまた、決して想見するに難くない事であろうと思う。

これまでプロレタリア文芸運動に属していた人々にして、実証主義と平等主義、民主主義、凡庸主義とからは到底産れて来ないような、超近代的に新しい表出形式を、新しい技巧を、いさざかも無理でなく、不自然でなく、芸術的良心のやましさなしに使用することが出来るようになつたとする。その時彼等が依然としてなお、マルクス派社会主義の信奉者であり、従つてプロレタリア文芸主張の本当の支持者であり得たとしたな

SAMPLE
ShopShinji.com

「近代」派と「超近代」派との戦

らば、それこそは実に驚くべき事である。

かくの如く私達は、プロレタリア文芸の主張その物に対して余りに多くの尊敬を払うことが出来ない。（文壇へ社会問題的興味を導いて来たと云う唯一の功績も、今や单なる過ぎ去った話である。）けれどもプロレタリア文芸の主張者等は、少なくとも何等の思想らしい物を自分達の物として有つことなしに、單に表出上の、形式の形式、技巧の技巧に於てのみ、新工夫を凝らし、新流行を支配しようとするような軽薄さから遠く離れている。そしてそれ故に、彼等の現在の主張その物に懸けることの出来ない希望をも、彼等各自の将来に懸けることが出来るのである。即ち私達は、彼等が先ず思想の上に、次にはそれを表出す芸術的形式及び技巧の上に、近代的な総ての旧い物を脱却して、超近代的に本当に新しい物をつかみ、これまでのプロ文芸対ブル文芸の戦から、「超近代」派と「近代」派との戦いにまで移つて行くことを、衷心から期待して止まないのである。

最後に今ひとたび反復して言う。本当の文芸は單にその時代から働きかけられているだけでなく、更に来るべき時代へ働きかけても行くようなものでなければならぬ。そしてただに所謂社会的な問題に關してのみならず、一般に、今日の文芸家が来るべき時代を予感し、構想し、規定したような作品の作者となり得る為には、彼はどうしても必ず近代と、近代的な一切の物とを超えて、何等かの意味に超近代的になつていなければならない。そして彼の常に戦つていなければならない最も大きな戦いは、「近代」派と「超近代」派との戦いなのである。

（1925.6）

超近代派としての重農主義芸術

(農村のための地方的小都市と世界的大都市のための農村と)

右の論文「近代派と超近代派との戦」に於て私は、神性主義に対する人性主義から、換言すれば実証主義的精神と平等主義的精神との二の根源から流れ出ている、さまざまな近代的、近代ヨーロッパ的思想悉くが、今や人類を向上させるよりもむしろ墮落させ、滅亡させる方へ役立つてること、又人類がこの滅亡を免れ、この墮落から回復する為に一切の近代的な思想や、傾向や、精神を捨てて、超近代的に全く新しいものを取らなければならぬことを論じ、そして次のように言つて置いた――

科学及び器械については、それらの物を強ち斥けるのではないけれど、それらの物を礼拝するような態度を全然取るまいとする――これは超近代的である。

商業主義よりも重農主義を、都会よりも村落を、文明よりも文化を、西洋よりも東洋を（単なるセンティメンタリズムからでなく、「近代」生活に対する最も深刻な批判の結果として）選び取ろうとする――これは超近代的である。

単純化に対する複雑化の偏重を、綜合に対する分析の偏重を、経験に対する実験の偏重を、ないし人間（ナポレオンがゲーテを見て、「人間」を見たと言った時の如き言葉遣いに於て）に対する専門家の偏重を、斥けよ

SAMPLE
Shoichi-Shinsui.com

超近代派としての重農主義芸術

うとする——これは超近代的である。

社会主義が存続する限り、その兄弟分たる資本主義もまた存続するであろうこと、並びに婦人を本当に解放する為にはさしあたり「婦人解放」という近代的謬見から解放してやらねばならぬということを知つてゐる——これは最後に、けれども最も最も著しく超近代的である。

トルストイや、ドストエフスキーや、ストリンドベリーや、ニーチェや、ラスキンや、モ里斯や、ベンティーや、カーペンターや、これらの人々がそれぞれに、さまざまな近代的事物に対して、如何に堪えがたき嘔吐感を抱いていたことか。近代主義に対する超近代主義の戦を、如何に勇敢に、如何に狂熱的に、如何に死物狂いに戦つっていたことか。

——これらの考察を一層具体化し、一層有効にする仕事の一部として、私はここに「超近代派としての重農主義芸術」を説いて見ようと思う。

何人も疑はないであろう如く、原始生活に於ける人類はまず、水草を追うて移り行くところの遊牧民であった。より厳密には、それ自らが単なる二足獸として、まだまだ獸を飼養することすら知るに至らず、むしろただ獸を狩り獸を屠つてその肉を食い、その皮を着ながら、あちらこちらへと処定めず漂泊流浪していたのに過ぎない。

専ら自然から、自然が産むところの物を掠奪して生活していたこの時代の人間は、彼等自身の子供として、彼等自身にひとしき二足獸を産むことのほか、未だ何物をも産むことが出来なかつた。一切の創造及び創造的なものは、彼等に縁のないものだつた。

そして掠奪の為、占有の為になされる、自然との間なる絶間なき戦いは、ついに彼等をその外的の、並びにその内的の荒々しき不安から休ませる時がなかつたのである。

けれども、やがて一の進歩が来る。

人間は彼等自身がその子供を産む如く、獸をして獸の子供を産ましめることを発明した。文字通り遊牧時代へはいつたのである。

これはもはや、単に自然が産むところの物を掠奪して生きるのではなく、むしろ先ず自然に助力して、その産むところの物をより多く産ましめ、然る後それを掠奪するのである。

更に、第二の大なる進歩が来る。

遊牧時代に於て、自然に助力して、自然が産むところの物を、より多からしめることを発明したところの人間は、次の時代に入つて自然の助力の下に自ら産むことを発明した。即ち耕作して生活することを知つたのである。

耕作者はもはや掠奪者でなくして生産者である。そして母なる大地が、耕作者の生産を手伝うことによつて瘠せ衰えない為に、大地の營養を怠つてはならないことを考えはじめた時、彼はいよいよ掠奪者でなくなつた。耕作の発明と共に、著しく漂泊流浪の傾向を少なくしていた人間が、大地との親密を加えれば加えるだけ、それだけ有利であることを理解するにつれて、いよいよ一定の土地に執着し來たつたのは、改めて説くまでもないことであろう。

久しい間、自然との絶間なき戦いを戦いながら、荒々しい不安の中に處定めず流浪していた人間獸も、農民

SAMPLE
Shoshi-Sinsei.com

超近代派としての重農主義芸術

となつてはじめて自然と相和し、外的にも内的にも動搖と不安とのない生活にはいった。掠奪や占有の禽獸らしい悦びでなく、生産や創造の人間らしい悦びと共に、生産者創造者にのみ恵まれるところの本当の平和がはじめて彼等に来た。

農民が彼等の培い育てるところの草木の如く平和で、そして幸福であると云つただけでは、未だ言い得て十分でない。げに彼等は、彼等自からが草木となり、深く大地へ根を下ろして居り、地の下に伸びるだけしか地の上に伸びまいとする、最も健かな、最も美しい生き物の姿を有つて居るのである。

農民ははじめて家を作つた。家もまた農民自身の如く、否、草木の如く、深く大地にその根を下ろしている。農民にとっての家は、最も善き財産であり、財産以上の財産である。むしろ彼等自身の、肉体の、生命の延長である。その価値は如何なる尺度を以てしても測ることが出来ない。それから離れるのは彼等自身の生命から離れることにほかならない。

初めに、それぞれの家を作つた農民等は、やがて彼等すべての為に町を、都市を建設する。

農民の建設したる都市もまた、その家の如く、農民自身の如く、否、草木の如く、深く大地にその根を下ろしている。

農民にとってのその都市は、彼等がそれぞれに収穫し得た物を交換するところの市場であるのみならず、彼等の魂と魂とを、生命と生命とを結合し、その事によつて神に近づき、神と一になり、彼等自ら神となる為に集まるところの公会堂である。

農民等がそれぞれの家を作つたあとに、彼等總ての為に都市を建設した時、厳密なる言葉遣いに於ける「文化」の花ははじめてほころびる。

そしてその都市が周囲の田園の為に存在している限り、都市の居住者が農村の居住者の支配者にならないでいる限り、彼等もまた何等かの意味に於ての生産者であり、その生活の根本精神を耕作者と一にしている限り、都市の発達繁栄につれて、いよいよ高く、いよいよ輝かしき文化は、文化的な一切の物は創造されて来る。

神話や伝説の土壤に培われて伸び育つて來るところの、否、神話や伝説その物の中に生きている人々によつて創造されるところのこの時代の芸術、道徳、叡智、それらの物を統一する文化の文化としての宗教——ああ、ただこれ等のもののみが、真に創造的な、真に生命のある、真に人類の誇りとなるべきところのものである！

ヴィンケルマンの、ゲーテの、フリードリッヒ・ニーチェのギリシャは、かくの如き文化の文化をもつた古代ギリシャの、田園及び田園的地方的都市にほかならなかつた。

ラスキンから、モリスから、ベンティーから、クロポトキンからすらも、過去に於ける最も健かに美しい芸術として嘆美されたゴシックの、中世ヨーロッパの建築その他は、またかくの如き農村の為の地方的都市から、商業主義ならぬ重農主義の「小社会」から生れていたのである。

だが、総ての物の花盛りは、やがて凋衰への第一歩であり、総ての黄熟したる果実は、やがて梢を去らなければならぬ。

その内部の成長がとまつてしまつたにも係わらず、なお依然として外部的に拡大しつづけて行く内に、都市は漸く自然との、大地との親密さをなくし、大地の底深く下ろして、いたところのその根を弛められて來た。それは次第に農村と縁遠い物になり、その居住者は農村の居住者と異なつた物になつて來た。即ち都會人はもはや農民の如く生産する者でなくなり、再び掠奪する者になつて來た。

今や都市が農村の為にあるのではなく、農村が都市の為にあるのである。都市から搾取される為にあるのであ

SAMPLE
Shop di Shirokoma

超近代派としての重農主義芸術

る。

地方的小都市から世界的大都市へ、生産者から掠奪者へ、これに伴うところの必然的推移が「文化」から「文明」へである。

文化は自然との合一であり、文明は自然との闘争である。文化は創造であり、文明は集積である。前者には量と質との調和がある。後者には単なる量があるばかりである。

単に量的なものとして、即ち単に物質的なものとして、文明には何等の生命もなく、何等の心靈もない。

重農主義から商業主義へ推移して後の都会人は、再び掠奪者であると共に、また再び漂泊流浪の二足獣である。原始生活に於ける漂泊人が水草を追うて処さだめずさまよい歩いた如く、文明時代に於ける二度目の漂泊人もまた、貨幣と貨幣的価値とのあとを追うて、世界の隅から隅に至るまで、到る処に流れ行く。

文明時代の都会人はもはや郷土を有たない。農民にとつての、他の如何なる尺度を以てするもその価値を測ることの出来ない神聖なる財産——そうした意味での「家」はもはや都會人のものでない。

彼等は單にそれを所有しないのみならず、またそれを理解することすらも出来ないのである。

郷土もなく、家もなく、従つて文明時代の都會人には神話もなく、伝説もなく、その上に築き上げられるところの如何なる創造的の芸術も、道徳も、叡智も、信仰もない。

二度目の漂泊人にとっては、智力もしくは科学が唯一の宗教であり、器械と貨幣とが全能の神である。

上代ギリシャに対するローマは、とくに世界都市としてのローマは、文化社会に対する文明社会であった。

イタリアの文芸復興期を境界として、中世人に対する近代人は、文化人に対する文明人であり、生産者に対する掠奪者（もしくは被掠奪者）であり、郷土人に対する漂泊人である。

原始人としての漂泊人は、掠奪することから生産することへ移つて、大地に定着した。けれども「最終人」としての二度目の漂泊人は、もはや生産生活へ、大地へ、郷土へ、創造的文化へ引き返すことが出来ない。
あんなにも絶えまなく、慌ただしく、好んで都会から都会へ移り行きながら、偶たまたま都會から田舎へ出た場合、偶たまたま海上に浮んだ人間の陸を慕う如く、あんなにも物狂わしく都會への帰りを急ぐ文明人を見よ。郷土なき二度目の漂泊人の、如何なる田舎からでも如何なる都會へでも、あの不可思議な、救いがたきノスタルジアを見よ。

二度目の漂泊人が、再び大地へその根を下ろす為には、彼等は彼等の街の敷石を取り去らなければならぬ。しかもこれ等の重き敷石を動かすのは、余りにも細い手を有もった脳髄人の彼等自身にとって、余りにも力にあまつた仕事である。そして、若しそうした仕事を易々となし得るような巨大なる手が、いつかこの世界の上に現れて来るならば、その巨大なる手は恐らく、世界的大都市の呪われたる敷石を粉碎し去ると共に、その敷石の上を地竜の如く跳びはねていたところの「最終人」をも同じく掃蕩し去ることであろう。

かつてローマ人は、その文化ならぬ文明と共に滅んでしまった。

今、近代のヨーロッパ及びアメリカに於ける、否、世界の全面に於ける、世界都市的な、文明的な二度目の漂泊人もまた、その文化ならぬ文明の為に、その文明と共に滅び去ろうとしているではないか？

それについても、近代文明と近代文明人との減んだあとに、或はそれらのものを滅ぼしたあとに、新しく農民

超近代派としての重農主義芸術

的な、田園的な、地方都市的な、真に創造的な文化を創造すべく、二度目の漂泊人ならぬ原始的な漂泊人が、地上のいざこにかなお残されていだろか？

これに対して、然りと答えるに躊躇しなければならない時、一部の人々は全人類の将来に対する一切の望みをなくしてしまう。

だが、人類は果して、近代的文明の為に、近代的文明人と共に、悉く皆、永久に滅亡してしまわなければならぬであろうか。

原始的漂泊人から重農主義文化への、全く新しい進行を期待することが出来ないまでも、なお且つ今も、都会化、文明化の汚毒を最も少なく受けている、最も「時勢おくれな」農民、ニーチェの所謂「新聞を読む階級」に対する「新聞を読まぬ階級」——それらのものを都会的文明人の滅亡に殉ずることから保護し、彼等をして重農主義社会へ引き返すべき復興的運動に中堅たらしめ、かくすることによって今一たび人類文化の復活再生を実現しようと試みるのは、必ずしも明白に不可能なものに向つて突進する、明白に無意味なる試みであるとは云われないではなかろうか？

かつて私は「農村問題断片」（それほど断片的な議論でもない）の中に次の如く述べて置いた――

そもそも世界的都市が世界的農村を荒廃衰微せしめることに依つて、自己の隆昌繁栄を来たしているというのは、専ら貨幣的価値の増減に重きを置いた見方であつて、眞実の意味に人類を幸福にし得るところの、健全なる使用価値の問題を閑却しているのである。

即ち、都會の為に生血を吸い取られたる農村のやせ方が病的であるのは勿論、病的になつてから農村の生血をも吸いとれる限り吸いとろうとしている都市の肥え方もまた、決して健全なものではなく、若しも名医を

して診断せしめるならば、むしろ都市の病的肥大の方が一層危険の症状であるというかも分らないのである。

今日必ずしもブルジョア御用の地位にあるのでなく、かなり自由な立場から、またかなり真面目に農村問題を論じている人々にして、なお且つ文化批評の浅薄さの為、農村の荒廃が他日都会の災厄となるべきことを云うに止まり、今日既に都會が農村以上の危機に面していることに想い到来ないでいるのは、この上もなく遺憾な事であると。

私は更に次のようにも述べて置いた――

世界的都市に依つて為される世界的農村の搾取が、今日眼前に見る如き速度を以て農村に於ける生産力を減退させ行くならば、単に農村人のみならず、都會人その物もまた食糧及び工業原料の一般的欠乏から生存しつづけて行くことが不可能になり、ついに人類全体の滅亡を来たすかも知れないと――一部の人々はそう考えて、眞面目に前途を憂えている。

これはある意味に於て、必ずしも單なる杞憂ではない。しかしながら、食糧及び工業原料の一般的欠乏ということが、厳密に分量的欠乏の意味に取られている場合、明らかに観測をあやまつていると云わなければならぬ。

なぜと云つて、資本主義經濟組織は資本家の貨幣的所得を増大する必要から、専ら量的生産能率を高める為、工業生産品の質を落として來てゐる如く、人類がともかくもして生きて行くことを得る為には、少なくとも農業生産物の量的不足に陥らぬよう、その質を悪化しても量的生産能率を維持して行くことを考えさせるからである。

思うに、一方では工業生産品が限りなくごまかし物になつて行くと共に、他方では不健全な、怪しげな、ご

超近代派としての重農主義芸術

まかし物の代用的食糧と代用的工業原料とが、あとからあとから限りなく農産物として出て来ることであろう。そしてそれらの食糧と工業原料とが厳密に量的の不足を告げるよりずっと前に、人類はそうした生活資料の、まかし的悪化に毒された為ばかりにも、十分に滅亡し得たであろうと。

——この後の観察の結果に対しても、私は更に次の句を補足して置きたいと思う——「しかも、そうしたみて、くればかりの、ごまかしの、思い切り病的な生活資料を、その本質に於ては最も危険な贅沢品のほかの何物でもないそれらの物を、より潤沢に消費し得るところの都会人等は、その事の故にそれだけより早く滅亡し得たであろう」と。

願わくば、「新聞を読む階級」のあとを追うて、「新聞を読まぬ階級」もまた没落し行くことのなかれかし！

更に願わくば、ただこの「新聞を読まぬ階級」の上にのみかけたる私達の一縷の望みが、ついにむなしものになり終ることのなかれかし！

世上に所謂社会主義、自ら唯一の科学的社会主義と称しているマルクス派社会主義、それが資本主義経済組織の所謂搾取的カラクリについて、かつて大いに私達を啓発してくれたことは、私達も快く承認しようと思うところの事実である。のみならず、世間多数の人々は現在もなお、今後もなお、つぎつぎに私達同様啓発されて行くことであろう。

しかしながら、マルクス派社会主義は資本主義が、搾取階級に対する被搾取階級の災厄であることを知って、同時に搾取階級の災厄でもあることを、即ち全人類の上に投げかけられたる大呪咀であることを知らない（拙

稿「ブルジョアは幸福であるか」参照）。資本主義の最も致命的な本当の急所を突き残しているのである。

それが単に工場主と工場労働者との場合に於てのみ非常に適切であり得るところの資本家対労働者の階級別を、同様に重要なものとして他の場合にも、とり分け夥しき農村居住者等の場合にもあてはめようとするのは、既に多くの人々に依つて指摘されている如く、マルクス派社会主義が如何に資本主義同様近代都市的精神に立脚しているかを語つて十分である。

資本主義同様現在の科学と器械とを礼拝し、大都市の生活と、文明と、文明的な一切の物とを謳歌しているマルクス派社会主義は資本主義同様頽敗した、それでいて粗悪な唯物論の信奉者であり、拝金宗徒である。

マルクス派社会主義者としてのボリシェヴィキが、その革命の第一歩に於て、農民及び農場の問題に関し、著しくも見苦しき一頓挫を来たしたのは不思議でなかった。なぜと云つて、貨幣価値よりほかの如何なる価値をも認めなくなつてゐる、特にシュペングラーの言葉をかりれば、一切の「原価値」を理解しなくなつてゐる文明人のマルクス派社会主義者が、「新聞を読まぬ」ロシアの農民の、その土地（及び家）に対する、所謂「愚かな執着」を度外視していたのは、あまりにも合理的な事柄だからである。

それにして、マルクス派社会主義の流れを汲むレーニンの徒が、氣長にもロシアの農民達を教育して、彼等文明人同様、貨幣価値以外の如何なる価値をも認めなくなる処まで、そしてその土地に対する所謂「愚かな執着」から解放される処まで文明人化し、都会人化しようとしている——これはそもそも何と云う事だ。これよりほかに、これより愚かな、これより恐ろしい深切が何処にあるだろう！

マルクス派社会主義は、ボリシェヴィキに於て実例を示している如く、一つの資本主義形態を新しい今一の資本主義形態に変えることが出来る。それに資本主義と異なつた、全く新しい名前をつけることも出来る。しかしながら、その本質を変えることは、自ら別個の問題に属している。

超近代派としての重農主義芸術

マルクス派社会主義が一応、一時、資本主義經濟組織を破壊し去るというのは、必ずしも不可能事でないと見てもよい。なお且つ、根絶されないでいるところの資本主義の毒草は、幾度刈り取られても、あとから後から何時までも、執拗にその芽をふき返して来ることを妨げられないであろう。

ギルド・ソシアリズムの名を以て呼ばれているにもせよ、サンディカリズムの名を以て呼ばれているにもせよ、ないしその他の如何なる名を以て呼ばれているにもせよ、とにかく、資本主義を根底から覆し永久にその息の根をとめてしまうことの出来るものは、マルクス派社会主義及びそれに近い総てのものの如く、資本主義と同一の根本精神から、即ち文明と文化との同一視から、文明的大都市的生活の謳歌から、器械崇拜から、「科学」教から出て来たところの如何なる思想でもあり得ない。換言すれば、少なくともその中心に、重農主義的な社会観と十分に調和し得るところのものを有つていなければならぬのである。

大都市的な、文明的な一切の物の否定としての私達の新しい重農主義的社会観——それは勿論、一切の器械を斥けるのではない如く、一切の工業を斥けるのではない。ただ、農業が本であつて工業が末であるという正しい秩序の、決して顛倒されてはならないことを要求する。そしてこの要求が十分に貫徹され得る為には、營利的な、商業的な一切の仕事が、少なくとも極度にまで害悪視され、不潔視されねばならないことを主張するのである。

マルクス派社会主義者等は、ただ彼等自らだけが資本主義の徹底的断滅者であると己惚れている故に、彼等の主張に共鳴し得ざる者を見る毎に、直にそれが資本主義退治に逡巡躊躇しているものであるかの如く思ひな

し、無雑作に彼等の所謂「反動主義者」の中に数えてしまう。

恐らくは私達重農主義的社会觀から、マルクス派社会主義の大都市的文明的根本精神を排撃している者もまた、彼等によつて所謂「反動主義者」の中に数えられることであろう。

だが、試みに今、尾崎豈堂先生程度の「憲政擁護」思想を最も進んだ、最も新しい思想であると信じ切つてゐる青年達がありとせよ。そして彼等の「憲政擁護」運動に対し、十分に熱情的な興味をもつことの出来ない総ての人間を、元老政治、官僚主張への諷歌者として、彼等の主張への反動主義者であると言つたとせよ。

マルクス派社会主義の人々も、抱腹絶倒しないではいられないだろう。

しかも、「憲政擁護」者流からの反動主義者扱いを、マルクス派社会主義の人々が抱腹絶倒しながら甘受するであらう如く私達もまた、マルクス派社会主義の人々からの反動主義者扱いを、むしろ一の光榮と心得るというのは、それほど不可思議な事柄でもないではないか？

新しき重農主義的社会觀をもつてゐる私達からすれば、私共の眼前に横たわつてゐる現実の芸術を批判し評価する場合にも、それが少なくとも大都市的なもの、文明的なもの一切に対する無自覺な満足諷歌から、どれだけ脱却して來ているかということを、最も重要な問題として考えなければならぬ。換言すれば、私達の新しい重農主義的社会觀と明白に相容れないようない傾向の芸術は、その本質的な部分に於て全然間違つた物であり、甚だ無意味な、或は無意味以上に始末の悪い物であると見なければならぬ。

とり分け、社会学的興味の勝つた、そして社会的時事問題に正面からぶつかつて行つたような芸術にあつては、芸術家は積極的に、何等か重農主義的な見地に立つてゐることをさえ要求されていいと思う。

超近代派としての重農主義芸術

マルクス派社会主義に立脚しない限り、理論上全然意味をなさない所謂プロレタリア芸術の主張が、過去に於てはどれだけの物を最近芸術界に貢献し得たか、今後は、社会問題的な芸術に関してすらも、どれだけ正しい進歩を遮るであろうか、これらの事はここには言わないで置く。

伝統主義芸術、郷土芸術、そして特に農民芸術について何事かを主張している人達の言説には、私もかなり以前から、かなりの興味を有し、かなりの注意を払って来た。しかも私の帰納し得た限りに於て、それらの人達の大抵は、文化的農村と文明的農村との混同にもとづく、幼稚な現実農村の嘆美から、まだまだ十分に脱却し切らないでいるが、マルクス派社会主義の見地からなされる現実農村の自然主義的描写を要求しているが、ないし、マルクス派的に覚醒して来るところの農民自身の芸術というようなものを要求しているかであつて、福士幸次郎氏、大槻憲一氏、伊福部隆輝氏等極めて少数の人々を除けば、悉く皆大都市否定、文明否定の意味に於ける、私達の所謂重農主義的社会観らしい何物をも、そうした社会観へ近づいて行きそうな卯の毛ほどの物をすら示してはいないようと思われる。

もとより私は、重農主義芸術という新しい名前を押し売りしようとするのでない。名前が伝統主義芸術であると、郷土芸術であると、農民芸術であると、ないその他の如何なるものであるとは、根本の問題ではない。ただ、近代的大都市の居住者にも「伝統」があり得るように考えたり、郷土主義が理解されるように考えたり、農民芸術を主張しながらも、なお且つ二度目の漂泊獸としての大都市人の芸術が、同様に本当の芸術であり得るようと考えたりする、考え方の浅薄と不徹底とが、私達にまで余りにも歯がゆく感じられるのである。だが、農民芸術を口にし、土の芸術を口にしている多くの人々よ、諸君にして若し幸に私達の説くところに耳をかすこと出来るなら、そして單だ農村及び農村の為の地方的小都市からのみ、本当に創造的な文化も芸術も生れ得るということを、また最終人として二度目の漂泊人の、つねに荷い歩く世界的大都市の殻が如何に

石化されたものであり、石化するところのものであるか、如何に「白く塗られた墓」であるかということを理解してくれたなら、願わくは勇敢にその脚を上げてマルクス前派的なる、並びにマルクス派的なる一切の物を踏み越え、まっしぐらに重農主義的見地にまで、重農主義的芸術觀にまで前進し来たれ！ 諸君はただこの前進に依つてのみ、その活路を見出しが出来るのではないか！

（1925.7）

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com